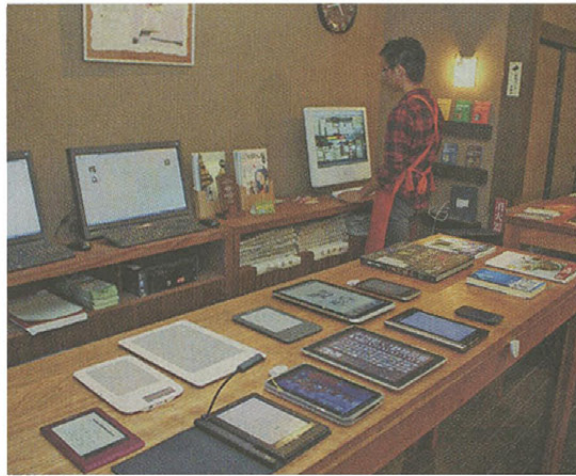


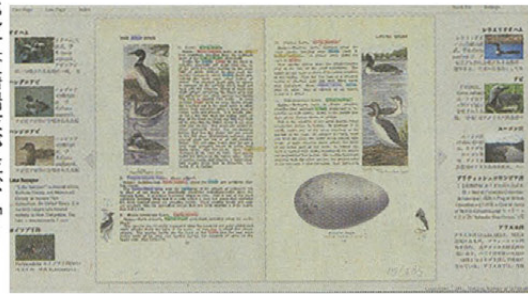
二〇一〇年はタブレット端末「iPad」が発売されて、「電子書籍元年」といわれました。しかし一年以上たっても、電子書籍の品ぞろえが悪い、理想の端末が登場していないなどで、日本では普及に壁がある状況です。そんな中、電子書籍を紹介し、未来の読書がどんな形になるかを考えるための施設が東京都千代田区にオープンしました。

体験施設オープン 東京

これが未来の読書



▲電子書籍端末が並ぶ「e読書ラボ」＝東京都千代田区神田神保町で



電子書籍端末11種類の本の本との比較も

明治時代から古本屋が並び、「世界一の古書街」ともいわれている東京・神田神保町。その一角にある「本と街の案内所」内に九月末、未来の読書を体験できるという「e読書ラボ（ラボラトリー＝実験室）」がオープンしました。

国立情報学研究所の連想

情報学研究所開発センターが企画・制作し、ラボに十一種類の電子書籍端末を用意したり、未来の読書環境を提案したりしています。

どんな未来をえがいているのでしょうか。現時点では、パソコン上で見られるようになっています。たとえば一九〇〇年代初頭の鳥

の図鑑をおさめた電子書籍は、イラストがえがかれた元の本のページの左右に、インターネットや現代の図鑑から取り出したさまざまな写真や説明文が飛び出しています＝写真右。小説の場合は、関心の高そうな単語の説明を左右に表示することもできます。

同じようなしくみは現在の電子書籍にもありますが、読む人が気になる言葉を見つけ、ネットを立ち上げて調べなくてはなりません。一方、ラボで提案しているのは、気になる言葉をコンピューターが自動で探し出して意味を表示するという、より手軽な形です。



阿辺川武さん

国立情報学研究所特任助教で、同ラボ長の阿辺川武さんは「たとえば教科書に導入すれば、より楽しく、わかりやすいものになるのではと考えています」。

電子ペーパーは目に優しく、電池も持つ一方で、カラーではなく、画面も小さい。タブレット端末は、おおむねその逆です。いまのところ、使う人が電子書籍を読む環境に合わせて端末を選ばなくてはなりません」と阿辺川さん。

また、紙の本とのちがいとして、阿辺川さんは「本を持つている喜び」をあげます。分厚い本を見て「これは手ごわいぞ」と感じる、それを読み終えたときの達成感……。紙の本でしか味わえない感情があるといえます。「電子書籍には、かさばらず、何冊でも持つて行けるといった長所がある。それに『ものとしての価値』をどう加えていくかが課題になってくると思います」

「端末はまだ発展途上で

e読書ラボ（ウェブサイトは、eokustio.info）では、今後も新しい読書の形を提案していくといっています。月曜から土曜までの午前十一時三十分～午後六時に開館し、日曜と祝日祭日は休館します。